



いのちのぬくもり

それぞれに色々なことがあった年も終わろうとしています。あたりまえのことですが、人生の日々は好ましいことばかりではなく、私たちは避けて通ることのできない悲しみや苦しみの中を生きて、年を重ねるといことは、そうした日々を生き抜いてきたのだということを実感する時節です。

また、年ごとに身に染みってくる言葉に「青年老い易く、学成り難し」があります。若いとき（健康な間）に学ばないとすぐ出来なくなるよ、ということが諭された言葉に、その根底にある「人生・いのち」というものの真理が、身をもって解ってくるからでしょう。それを思わせるのが、映画の中で寅さんが、若者を「青年！」と呼ぶ場面です。そこに寅さんの反省を込めた自分にはもうなくなった若さへの眩しさと、人生を大切にしろよ、という励ましと情を感じるからです。

* * *

お釈迦様は80歳の旅路で、村娘から施された食事による食中毒で亡くなりました。責任を感じて泣く娘や弟子に、釈迦は「嘆くことはない」と慰め、「私は生まれたから死ぬのである。汝の供養の食事は、私の死の縁である。私の死の因は、私が生まれたことにある。生まれた者は必ず死ぬ。たと

え、汝の施しを食さなくても、他の縁で必ず死ぬのである。嘆くな。汝は私に死の縁を与えた。汝は大きな功德を積んだ…」と諭されたと伝わっています。

人（生き物）はみな、何か縁（きっかけ）になって必ず死ぬ（命を終えて往ける）ように組み込まれて生まれてきます。病気や事故は死の縁に過ぎません。しかし、多くの生物が生命の終りを自然に受け入れていく中で、「ああ、そうか」で済ませられないのが人間なのです。宗教は、そんな人間の苦悩の真の原因を説き、悲しみ苦しみの底から救い上げ、いのちの終わりに安らぎを与えてきたのです。

病院の談話室などでは、「同病相憐（同じ病気にかかっている者が互いに同情し合う）」、「同憂相救（同じ心配事を持つ者が互いに助け合う）」という情景を目にします。相互に病状を語り合い、慰め、元気づけたりするのですが、同病、同憂は病気になった者同士だけに言っているのではありません。私たちは生まれ出た時から、同病であり同憂だったので、それを気づかせてくれたのが、自分に降りかかった困難なのです。

この心情は、「悲（うめき、嘆き）」です。この悲は、単なる悲しみではありません。自分が人生の苦に悲しみ悩むと、他の苦悩がよくわかって、他人事ではなくな

この慈しみも単なる愛おしみではなく、すべての人を親友とする情愛です。人生で避けられない苦悩こそが慈悲を育む尊い種なのです。仏のみ教えはそのことに気づかせてくれ、苦悩の経験を負とせず、他を慰め、ともに悲しみ嘆き、他を慰めることで自分も癒される智慧を与えてくれます。

* * *

「老・病・死」は「終えていける安らぎ」のための尊い縁だと受け入れた時、生かされているいのちのぬくもりに気づかされます。そして、それは自分だけではなく、すべてに対する思いやりにつながります。人は生まれた時すでに「死の告知」を受けていますが、「余命告知」は受けていません。その日はいつかは判りません。生きつつあるということは、そのまま死につつあることです。だから健康なときから、世の真理、法則性を正しく知った上で心の準備をしておかなくてはならないのです。私たちはこのことを観念ではなく、一生をかけた誓願として心に入力し続けなければなりません。

死にたくなくても、老いたくなくても、必ずそうならなければならぬのは、誰にも平等な「いのちの真理」です。だからこそ、生かされる今の「生命・いのち」にぬくもりを感じ、ありがたく喜べるのです。

奏庵法座

日時
12月26日(土)
午前11時～
「真宗宗歌」
正信偈
法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

年も押し迫り、街にも師走のざわめきを感じられます。行き交う人々を見ていると、それぞれに色々なことがあったであろう一年を経て今を生かされているのだらうと労わり合いたくなります。

奏庵にも試練の年となりましたが、おかげさまでこうして年末のご法座を迎えさせていただきますこと、心より御礼申し上げます。

今年も「無事」の掛け軸を掛けました。

年末のご法座です。

どうぞお参り下さい。



平成28年のご法事

年回表	没年
1周忌	平成27年
3回忌	平成26年
7回忌	平成22年
13回忌	平成16年
17回忌	平成12年
23回忌	平成6年
(25回忌)	(平成4年)
27回忌	平成元年
33回忌	昭和59年
50回忌	昭和42年

仏縁を大切にお勤め下さい

すべての生き物は同類

まっとうな宗教なら、「人を殺せば幸せになる」とは言わない。ところが、誰もが知る通り、今も世界は宗教の名で血塗られている。宗教のせいで殺された人の数は想像もつかない。なぜ宗教が殺人と結びつくのか。その一番の理由は、「同類」の意味の取り違いである。それを「同じ考えを持つ者」と限定してしまうと、「自分たちの考えに従わない者は同類ではない。敵だ。」という理屈になる。殺さないまでも憎しみが正当化され、争いの火種となる。同じ宗教仲間だけでがっちり砦を築いて、外部を敵対視する宗教は、必ず暴力性を帯びてくるのだ。

仏教の歴史にも、血は染みついている。それは否定できない。だが釈迦の仏教は、「人には、仏の教えで助かる者もいれば、別の道を行く者もいる。せめて、こっちを向いてくれる者だけでも助けよう」と考える。すべての生き物は「考えは異なっても、生き物として皆同類だ」と考えることで、仏教は一切の暴力性を振り払った。その理念が、混迷する世界情勢の指針とならないだろうか…。

佐々木閑「日々是修行」参考

すべて大晦日のやることを済ませた後、やっと制作にとりかかる年賀状に宛名書きをしながら、「来年は古希、70でキリがいいから最後にして失礼しようか」と話した元旦の朝を思い出す。■そんな今年、後半になって大病を抱える身になった。ほんとうに最後、ひよっとしたら喪中ハガキになったかも…と思うと、大仰に「やめる!」と宣言しなくとも、出来なくなる時は嫌でもやって来る。自然に消えて終わっていくのがいい…と思えるようになった。■考えてみれば、我が家からは義理で出しているものはない。どちらかといえば結構好きで出している、味気のないものが多くなったとはいえ、お正月に届く年賀状の楽しみは捨てがたいものだ。それに年に一度の年賀状は、まだ生きているぞ、と知らせ、縁ある人々の安否を知るという大きな働きもする。家族そろった年賀状が送られてきていたのが、いつの間にか夫婦だけ…、一人だけに…。そして子供家族の最後に名を連ねるだけになる。そんな家族の変遷に自分の歳が重なり、「あけましておめでとう」とは、過ぎしてきた日々と今あることの重さへの祝辞だったのだと気づく。■長寿は幸せなことではあるが、時に若くして終えて往った兄姉や、友人たちのことが、ふと羨ましく思えることもあるし、入院中、無くなった髪の毛を隠す帽子をかぶった若い娘さんを見ると、一瞬自分にはいつその時が来てもいいと思えたりもしたが、そう思う尻から、生きようとする何かが体に湧いてくる。まだ生きて何かすることがあるはずだ…と。■93歳の瀬戸内寂聴師が、これ以上長生きはしたくないけれど、自分の死ぬ日がわからないというのは、罰か慈悲か。不問のところ、やはり仏の慈悲なのであると思うと書いていた。私もそう思う。「美しく老い、美しく死にたい」なんて望まなくなったが、その先はちゃんと定まっている安らぎはある。だからその日まで「生きること」を見せる役を果たそうと決めている。お互いにまた精一杯生きて、「それで良し」とする年